I C T活用で対話的な言葉を引き出す

—漱石『夢十夜』とハーン作品を比較して文学を享受・共有する授業—

教育デザインコース 国語領域

岩田 晴之

1 研究目的

文学作品を享受・共有する授業において、知識を下達するだけの授業ではなく、作品や作者に関して生徒の発話を促し、教室内で対話的な言葉を重ねる実践が求められている。こうした面でI C Tを活用することによる効果としてはどのようなことが期待できるのか。実際に行った実験授業の生徒の感想を分析することによって明らかにしたい。

2 授業概要

2016年3月、神奈川県立A高等学校において、1学年「国語総合」の現代文分野の授業として以下の授業を実施した。

①単元名：漱石『夢十夜』をハーン作品と共に読む

②日時：2016年3月17日、18日

③授業者：岩田晴之

④使用テキスト（プリントで配布）

(1)夏目漱石『夢十夜』より第一夜、第三夜

(2)ラフカディオ・ハーン「お貞の話」「持田浦の話」

⑤授業内容

(1)授業者がすべてのテキストを範読した後（作者・題名は伏せる）、生徒にインターネット検索で各テキストの作者や作品名、作品の由来などを調べさせる。

(2)テキスト間のプロットの類似性に着目させ、作品が成立した時代などを検討する。

(3)両作品中の「愛」の形に着目して意見交換し、前近代と近代の感じ方の違いに気づかせる。

以下、Google Formを活用した(2)の授業終了後、同じくGoogle Formを活用して行ったアンケートの結果を示し、これに対する考察を示す。

3 文学の授業に Google Form を活用する効果

(1)「語りやすさ」（匿名性、親和性、即時性）

①「指名されて発表するよりも正直に書かれていた気がする」「アンケートは匿名だしやりやすかった」→匿名であることを肯定的に捉える。

②「スマホでのアンケートは言いたいことが言いやすいし、斬新だった」→生徒はスマホやSNS的なものへの

親和性を持っており、これらを利用することに肯定的である。

③「リアルタイムで観れるのが面白かった。」→すぐに意見が反映される即時性を肯定的に受け止めている。

(2)多様性のある意見、多面的な見方（全体性1）

①「…それぞれの解釈をされていて面白い…」 「人によって違うのは不思議」（類似のもの8件）→多様な意見に触発されて、作品や関連事項への興味関心が深まる。

②「…色々な人の意見がすぐにみられるのは画期的…」 「多面的に考えられるいい機会になりました。」 「いろんな説があり、ちゃんとした根拠があるので、どれが真実でもいと思った。」（類似のもの4件）→生徒は、全体の意見が多様であること、多面的であることに肯定的である。

(3)集合知を見た後に専門知と出会う（全体性2）①「研究者や作家の解釈はなるほどと思った」→今回は、先にクラスの集合知（Collective intelligence）を共有した後に専門知（今回は平川祐弘らの著作による漱石のハーン観）を示した。教師から生徒への単声的な言葉で語られると、意義ある専門知も生徒の心に残りにくい。生徒同志のコメントが共有された後、「対抗の言葉」として語られた時に、はじめて、対話的な言葉が生み出されうる場ができるのではないか。

4 まとめ

Google Formでの意見交換はいくつかの点で今までの教室で難しかったことを実現している。

①匿名性（安心して言葉を発することができ、多様性も担保できる）

②即時性（比較的早期に、簡単に、フィードバックが可能であり、生徒の発話意欲を高める）

③全体性（意見の多様性を知り、言葉を多声的に受け止めるが可能になる）

様々な幅広い視点、興味深い意見に触れて、各自の思索も深まり、言葉を発する意欲も高まるのであろう。授業後アンケートからは生徒の「言語文化への興味・関心」の広がりを感じられるたことも報告したい。対話的な言葉の重なるの成果と考える。